

「観梅の謎」を解く——「澤山保羅と新島襄」研究序説
Solving the “Mystery of Plum-Blossom Viewing”
: An Introduction to the Research
of “Paul Sawayama and Joseph Neesima”

高田 太

TAKATA Tai

キーワード：澤山保羅 新島襄 梅花女学校 梅花 観梅の謎 月ヶ瀬

はじめに

明治の初め、米国会衆主義教会 *congregational church* の強い影響下にあったアメリカンボードという宣教団体との関係において、時を置かずして関西に四つのキリスト教主義学校が生まれている。1875年10月、アメリカンボードの宣教師タルカットとダッドレーにより女学校（後の神戸女学院）が神戸に誕生、同年11月、アメリカンボードの準宣教師であった新島襄により同志社英学校、続けて1876年10月に宣教師スタークウェザーにより同志社女子塾（後の同志社女学校）が京都に誕生、そして1878年1月、澤山保羅と、彼を牧師として立てた浪花公会、そして梅本町公会により梅花女学校が大阪に誕生したのである。

これら同じく会衆主義教会に連なる四つ、あるいは立地と名称に着目すれば三つの学校組織は、その運営の形態においてそれぞれに異なった特徴を示している。すなわち、神戸は完全にミッションボードの主導であり、大阪は完全に日本人キリスト者、あるいは日本人教会の主導である。これに対して、京都はそれらの中間にあった。そうした意味では神戸女学院だけが「ミッションスクール」と呼ばれる。

その他の二つの学校は、何らかの形で日本人が主導権を握ったものであるが、そこに登場する二人の日本人、新島襄と澤山保羅には幾つかの共通点がある。すなわち、まず両者共に米国に学んだこと、元々の名を捨てて、聖書の人物から新たに名を得ていること（新島は創世記のヨセフ、澤山は新約聖書のパウロから）、日本人として最初に按手礼を受けた牧師であること（新島は1874年に米国で按手礼を受領している。これにより彼はアメリカンボードの準宣教師の職を務めることができた。しかし、西京第2公会、また同志社教会において彼は仮牧師を務めはしたものの、正規の牧師となることはなかった。これに対して澤山は1877年に「日本で」初めて按手礼を受領し、同時に設立された浪花公会において日本人として最初の牧師となり、10年にわたりこれを務めたのであった）がそれである。この二人はどのように似たものとして、熊本バンドなどの伝道者に一歩先駆けて、明治初期、日本のキリスト教宣教の未だ冬の時代に、京都と大阪で共にその最前線を走った。

これに対して両者の違いは、前記の学校組織の運営のあり方にも現れている通り、自給 *self-support* の精神を巡って生じている。宣教地において自由、自治、独立（自給）の教会を生み出すことは、アメリカンボードのそもそもの宣教方針であり、その目的であった¹。澤山はこれに従い抜いて、教会においても学校においても、ミッションボードの資金に一切頼らない自給での運営を貫き通した。またその重要性を声高に主張し続けた²。これに対して新島はアメリカンボードから給与を与えられ（これは新

島の米国での養父にして資産家であり、アメリカンボードの理事でもあった、アルフィーアス・ハーディーの支援によるところが大きい)、また学校運営のためにもボードからの潤沢な資金をためらいなく用いたのであった。新島がアメリカンボードから与えられていた給与が月 62.5 円であったのに対して、澤山の浪花公会からの謝儀は少ない時には月 7 円、多い時でも月 15 円である³。

こうした両者の違いについて、和田洋一氏は 1973 年の著書『新島襄』において、梅花と澤山を新島と同志社に対置し⁴、後者の成功を強調して次のように記している。

「新島と同じように、アメリカの会衆派教会で洗礼を受け、同期にキリストの道を伝える決意を抱いて帰国した沢山保羅は、その清貧と自給 (self-support) の思想・生き方のために、しばしば新島襄と比較される。……大阪の梅花女学校は、アメリカの伝道協会の援助なしに設立された最初のキリスト教主義学校である。梅花は、一八七八 (明治十一) 年沢山の努力によって誕生した。……沢山が清貧主義を貫いたことは貴い。ただ清貧主義は、陽の当たらない片隅に、ほんのりとおう小さな花でしかないかもわからない」⁵。更に次のようにも記している。「沢山保羅は……自給独立を主張するだけではなく実行し、同志とともにささやかなキリスト教主義女学校を設立して世の中にのこしていった。新島は……外国の伝道協会と理解ある個人からの経済的援助を受け、後進国日本の教化教育のために奮闘した。……外国からの浄財によって同志社の赤れんがの校舎はつぎつぎと建ち、沢山にくらべてより広い感化、大きな事業を新島はのこしていった」⁶。

そのように澤山と梅花を評価した和田氏は、しかしその書の結びの部分で、「新島襄と沢山保羅」というようなテーマのもとに論文が今後書かれることを望むと書いている⁷。それからすでに 45 年が経過している。その間に 1977 年の『沢山保羅』や 2001 年の『澤山保羅全集』の刊行などもあったが、残念なことに和田氏が言うような「新島襄と沢山保羅」というテーマでの論文は発表されてはいないし (本井康博氏が 2016 年の『新島襄の師友たち』で、大きな括りの中でこれに応えようとしてはいるが)、包括的な伝記である『沢山保羅』⁸においても、また 2006 年の『郷土の偉人・愛と祈りの人——澤山保羅』においても、その関係については簡単に触れられるに留まっている⁹。そうすると、梅花と澤山は、ともすれば和田氏が同志社と新島との比較で描写した、その位置に甘んじ続けて来ているとも言えるのかもしれない (その全集の分量にしても、研究文献の数にしても両者の間の差は、実に和田氏の言及するところなのかもしれない)。

そこで、本研究はこの和田氏の期待に応えることを志すものである。その目的は、果たして 1973 年の和田氏の眼前にそう映ったような澤山と梅花、同志社と新島との関係が、両者の建学の時点において、また澤山と新島が共に生き、共に走ったその時においてもそのようなものだったのか、あるいは別のものだったのか、そして両者がそれぞれをどのように意識していたのか、これを洞察することにある。加えてそのようにして、ハーバーマスの言うところの「宗教的伝承の意味論的遺産 *semantische Erbschaft religiöser Überlieferungen*」を探索し、これを「我がものとする」¹⁰作業 (つまりは、理性により宗教に批判的に向き合いこれに攻撃を向けるというよりは、その理性にも合致する合目的的などころを、重層的に作用する宗教的伝承から取りだして、公共的な言説に取り入れて行くという作業) を通じて、現在においても両者がその建学の精神において、また会衆主義教会の精神において、相互をより豊かに語りうるための言説を構築し提示するところにある。

1. 本論文の目的——「観梅の謎」を解く

本論文はそうした研究へと筆者を動かした動機を示し、続くべき研究の端緒を開こうとするものである。そこで本論文としての第一の目的を、1973年に野田宇太郎氏の提起を受けて¹¹、本井康博氏がこれを整えた「観梅の謎」に対して¹²、妥当な解を提示するところに設定したい。この課題こそが続く研究の動機を構成する。その「謎」とは以下のものである。

1887年の4月1日、新島は木津から、奈良に伝道に赴いていた甥、新島公義に宛てた手紙において、「偷閑梅花之消息を問ハント欲シ、今朝俄ニ思立而木津ニ来ル、三時過キナリ、是ヨリ笠置ニ参リ可成ハ夜行シテモ月瀬ニ参リ一泊」¹³と記している。文面から窺えるのは、新島はその日の朝に「梅花之消息」を問うことを思い立って、おそらくは慌ただしくも京都を発って、午後3時に木津まで来ているということである。更にそこから笠置を経由して、夜行しても月瀬に向かうという。月瀬とは、当時梅で知られていた月ヶ瀬溪谷、南部の山手にある集落であり、そこには騎鶴楼という名高い宿があった。この宿からなお少し登れば、視界が開けて溪谷全体を見渡すことのできる高みに達することができる¹⁴。

宿帳の記録によれば、新島が月瀬の騎鶴楼に入ったのは午後9時頃であり、翌日の朝8時には宿を発っている¹⁵。先の新島公義宛て書簡から窺うに、その日は京都南部の小倉に移動して一泊、その翌日そこで「有志者ニ演説」の用があった¹⁶。1887年の4月3日は日曜日であるから、おそらくそこで礼拝を守りもしただろう。つまりは、本井氏が指摘するように、まずは小倉での用事があって、おそらくは2日に小倉での宿泊を予定していたところ、どうせ南に行かねばならないのならと1日の朝に思い立って、この機会に月ヶ瀬を訪れることにしたというところであろう¹⁷。なぜ新島が月ヶ瀬に梅を求めたのかについては、その前年に同志社の生徒9名が月ヶ瀬を訪れているから¹⁸、それら生徒から月ヶ瀬の梅について話を聞きもしていたことが想定できる。しかしなぜ新島がそのように思い立ったのか、また、なぜそれがもう梅も終わりの4月1日であったのかについては、本井氏の論題、「観梅の謎」が示すとおり謎に留まっている。

本井氏の著書での問題提起に応える形で、多田直彦氏がこの「観梅の謎」を解こうと試みている。ここでも「観梅の謎」について、また新島と梅との関係について様々に推測がなされているが、その結論は組合教会と一致教会の教派合同という難問について「月ヶ瀬の梅林の中でじっくりと考えてみたかったのであろう」¹⁹というものであり、和田氏が、持病や日本の教育についての「悩みの解決を月ヶ瀬の自然の中で一人考へるため」²⁰と述べたところとあまり変わることなく、一般的な憶測や想像の域を出ないものである。そうしたわけで、なぜ新島がこの時に月ヶ瀬を訪れたのかについて、決定的な解は与えられてはいないと言わざるを得ない。

以上が「謎」の内実であるが、そうした先行研究を補足して言うならば、まさに1887年頃、奇しくも月ヶ瀬では「梅花之消息」が問題となっていた。江戸時代に烏梅——これは梅の実を燻製にしたもので紅花染めの染料として用いられていた——の栽培で栄えた月ヶ瀬は、明治維新に前後して西洋から合成染料が伝来すると一気に衰退した²¹。朽ち行く梅林を守るために「月瀬保勝会」が立ち上がるも、村民の支持を得ることも難しく、その活動は頓挫したという²²。これが軌道に乗ったのは町村制が施行された1889年以降で、そうすると新島が月ヶ瀬を訪れたのはその直前であるから、月ヶ瀬ではまさに「梅花之消息」が問題となっていたその時である。なお、烏梅に用いる梅は早咲きであったが、その後には

食用の遅咲きの梅が植えられていったようで、現在の月ヶ瀬に観られるのはこちらの梅である²³。新島の時代の月ヶ瀬の梅林が烏梅の梅で、それが早咲きであったなら、4月1日ではなおのこと梅花を観ることはできなかつたはずである²⁴。

とはいえ、仮に——ありそうにはないことだが——新島がそのような月ヶ瀬の事情をつぶさに知っていたとしても、それだけが「観梅の謎」を解く鍵であるとは言えそうにない。あるいはそれを知っていたとしたらなお更に、なぜそのように衰退の道を辿る月ヶ瀬を新島が訪れようと思ったのかという問いも生じてくる。ましてそれは梅花も終わりの4月1日のことであり、いよいよ「謎」は深まる。

そこで本論文はその謎の解を、新島と澤山との関係に、また澤山が校長を務めもした「梅花」女学校との関係に求め、より蓋然性の高い解を示そうとするものである。

2. 1887年の出来事

まずは新島の観梅の年、1887年の新島と澤山に関係する出来事を描出する。

1887年、1月20日、大阪土佐堀の基督青年会館で浪花教会（前の浪花公会）創立10周年の記念会が行われた。同教会を10年にわたり導いた牧師、澤山保羅は和歌山での病氣療養のためこれを欠席²⁵。午前には創立10周年の記念式典が、午後1時半からは、大阪教会（前の梅本町公会）の牧師として着任していた宮川経輝を議長として、前年の4月16日に辞表を提出した²⁶澤山の牧師解職式が行われ、続けて午後2時から礼拝が持たれた。ここで牧師澤山に代わって説教と洗礼式を担当したのが新島であった²⁷。その後、澤山は2月11日に大阪に戻り、バルナバ病院に入院、2月17日には梅花女学校校長を辞任し、これを宮川経輝に委ねている²⁸。そこからおよそ1ヵ月後の3月16日、新島も校務多忙と自らの健康とを理由に、同志社教会仮牧師の辞表を提出する²⁹。そうして3月27日に澤山が永眠するのである。その葬儀は3月29日に基督青年会館で行われた。ここでグリーンと共に告別説教を担当し、また祈禱を捧げたのも新島であった³⁰。

つまりこの年、新島は、自らも健康上の理由から同志社教会仮牧師を辞するという心境にありながら、それに先立って健康上の理由で浪花教会を辞し、また梅花女学校校長を辞し、そして遂には地上での生を終えた澤山に、その葬儀での告別説教を担当するまでに深く関わっていたのである。

3. 「梅花之消息」

新島が月ヶ瀬に赴いたのは、その葬儀のわずか2日後であった。

そこでこうした日程、すなわち、「梅花」女学校の創立に関わり、後に校長も務めた澤山保羅の告別説教を3月29日に担当して彼を天に送った新島が³¹、そこから2日を置いて「梅花之消息」を問うことを思い立って月ヶ瀬を訪れたというこの日程は、この二つの出来事が新島において深く関係しているという推測を促す。新島は過日に若くして世を去った澤山を思って、そしておそらくは直前に同志社教会を辞した自らの行く道をそこに重ねつつ（新島も1890年に世を去っている）、用事のついでとはいえ、それゆえにこそ「俄ニ思立」って、まさに4月1日の「梅花」の終わりの時期に、澤山の、そして今やその澤山を失った「梅花之消息」を問うべく、月ヶ瀬を訪れたということではないだろうか。そうしてみれば、先の本井氏や多田氏の論考においても、新島自身が「観梅」に行くとは言わず、「梅花之消息」

を問うと言っていることが看過されている。

そこで結論を先取りして言えば、新島にとって澤山という人物は、何よりも「梅花」を想起させる存在であったと言えるのではないか。澤山は日本で最初の牧師である。そしてその召命の始めから、未だキリスト教宣教にとっての冬の時代に、敢えて自給の精神を主張してこれを浪花公会に花開かせ、会衆主義教会の伝統に則って、薄給にもかかわらず自らその牧師を務め、更に梅花女学校をも導いて、そのすべてにおいて自給の精神を——自らがその名を我がものとした使徒パウロの精神を貫き通した人物である³²。何より大阪という地は、女学校の創立教会である「梅」本町公会にせよ、浪「花」公会にせよがその名に抱くとおり、「梅花」の地であった。古の和歌、「難波津に、咲くやこの花冬ごもり、今は春べと、咲くやこの花」にも歌われており、今もその中心は「梅」田である。

これに加えて後の考察を先取りして述べるならば、1878年、梅花女学校創立の年に、日本における会衆主義教会の伝道協力組織として日本基督伝道会社が創設されている³³。その創設のための会合の日時は1月2日から3日、会場は梅花女学校であった。女学校の開校は1月7日、府知事の認可が18日でこれが創立記念日になっているのだが、驚くべきことにそれ以前のことである。ここにその時、関西に存在していた会衆主義の9教会、すなわち神戸、梅本町、三田、兵庫、西京第1、第2、第3、浪花、多聞公会が、その梅花女学校を会場に大親睦会を行い、その席で伝道会社の設立を決議したのである。新島は妻の八重を伴ってこれに参加し、議長を務め、また今村謙吉、澤山保羅と共に伝道会社の委員となっている³⁴。この伝道会社の第3年次会もまた梅花女学校で行われ、当然ながら新島もこれに加わっている³⁵。そうであれば、1877年に浪花公会の設立式、そして澤山の按手礼式に加わりもした新島は、それと共に「梅花」が花開かんとするまさにその時に、その「梅花」に関わっているということになる。

それゆえに、澤山の葬儀と新島の観梅の日程、そして「梅花之消息を問ハント欲シ」という新島の言葉が何より、新島にとっての「梅花」が、同時に澤山を、そして梅花女学校を想起させるものであったという推測を支える。とはいえ、そうした推測に直接の確証を与えるような新島の発言や記録は存在しない。また両者の間の手紙のやり取りは一通も残されてはいない³⁶。そこで、この推測はどこまでも推測に留まらざるを得ないものであるのだが、それでもなお、時を遡って新島と澤山の関係を綿密に跡づけることで、これを確証に近づけることは可能であるはずである。それはまた、新島が梅を思う時、同時に梅花女学校の姿が、そして澤山の姿が、加えてそれらの精神が必然的に想起されていたことを確かめる考察となる。そこで同時に問題となるべきは、新島にとってその「梅花」の精神がどのようなものとして捉えられていたのかということでもある。これが、この論文以降に継続して問われるべき「澤山保羅と新島襄」研究の課題となる。

4. 本論文の結論とそこから生じる研究の課題

これまでの考察から明らかとなるのは、新島にとっての梅、それも衰退してゆく月ヶ瀬の梅が、澤山保羅と梅花女子学校とに結びついているということであり、また、新島が按手礼式に加わり、葬儀で告別説教を行った澤山保羅とその「梅花」の精神は、そしてまた澤山の死という出来事は、新島を月ヶ瀬への無理な旅路³⁷へと駆り立てるほどのものであったと考えられるということである。本井氏は新島が梅に観た精神を「敢為ノ精神」としている³⁸。梅花女学校において、そして澤山においてその精神は自

給の精神である。欲すればアメリカンボードの資金を用いることができたにもかかわらず、澤山も、浪花公会も、梅花女学校も、「敢えて」自給を貫いたのである。

そこで更に疑問として浮かび上がってくるのは、なにゆえにそうした二人の関係がこれまでに注目されてこず、また言及もされてこなかったのかということである。なんとなれば、『新島襄全集』第8巻の年表においても、澤山の葬儀と新島の月ヶ瀬観梅は、頁と一つの項目により隔てられてはいるものの、時系列ではほとんど隣り合って記されているのであるから、澤山が「梅花」女学校の創立に関わっており、その校長を務めたことを知るものであれば誰であれ、これを見たものはその関係に目を向けざるを得ないものであるように思われる。そこで端的に言うならば、このことは同志社において、あるいは新島研究において、澤山保羅と梅花女学校とがいかに顧慮されてこなかったかということを示してはいないだろうか。

敢えて述べるならば、冒頭に引用したような、澤山の「清貧主義は、陽の当たらない片隅に、ほんのりとにおう小さな花でしかないかもわからない」というような和田氏の評価、あるいは、「外国からの浄財によって同志社の赤れんがの校舎はつぎつぎと建ち、沢山にくらべてより広い感化、大きな事業を新島はのこしていった」というような評価の仕方、そしてその結果に、そうした問題の一端を垣間見ることができるのかもしれない。しかしながらそのような点でのみ、双方の建学の精神、またこれを為したその時代の両者の関係が測られるものであってはならないはずである。その点で、両者の関係についての論文が書かれることを和田氏が期待したとするならば、梅花の側での研究にも、その視野における一面性という問題があったと言えるのかもしれない。

新島の同志社と澤山の梅花、その両者は、その創立者の交わりにおいて、また建学の精神の関係において、相互のより豊かな関係を認識し、これにより今日にもまた同じ会衆主義の伝統に立つ学園として、より豊かな関係を構築して行くことができるはずである。そうした作業はまた、今日、会衆主義の伝統に立つ教会のアイデンティティーを模索する試みにとっても、大きな意義を有するはずである。

本論文によって提示することができたのは、厳密な意味での史的研究の成果というものではなく、既存の史料を用いての、新島の「観梅の謎」の解についてのより高い蓋然性を持つ推測にすぎない。その背後にあるだろう史的事実の解明について、また新たな史料によるその裏づけについては、これを明敏なる歴史家の手に委ねる他はないであろう。

しかし、むしろ本論文として続けて提示したいのは、明治の初期、会衆主義教会に連なる学校組織として生まれ、現在まで続くキリスト教主義学園それぞれの豊かな関係に関する「宗教的伝承の意味論的な遺産」を探索し、これを「我がものとする」ために、ひとまずは「澤山保羅と新島襄」という主題において、本論文にどのような研究が続く必要があるかの素描である。

まず、為されるべきは、両者の関係を正確に洞察するために、澤山と新島の接点の全てが時系列に沿って詳細に描出されることである。その際、両者がそれぞれの仕方で直面させられた自給論とこれを巡る論争は、両者の関係、更には明治初期の関西の会衆主義のキリスト教主義学校が置かれていた状況と問題とを明らかにするために、避けて通ることができない考察の重点となるだろう。その時期は、澤山と新島とが最初の間接的接点を得た1875年から始まり（前年の12月に米国より帰国した新島は、その時横浜にいたグリーンを訪れ、1月7日には同じく横浜で、まさにそこから米国に一時帰国して、その

年に澤山と会い、彼をキリストの道へと導いたアメリカンボード宣教師レビットにも会っている。新島はそこでグリーンから澤山についての話を聞いたであろう³⁹⁾、澤山の死の1887年、あるいは新島の死の1890年の間である(新島は澤山死後の1888年、梅花女学校の新校舎の竣工式で勧告を行っている⁴⁰⁾)。この12年、あるいは15年の間に両者の関係がどのようなものであったのか、またその関係がどのように推移したのかを描出し、そのことで「観梅の謎」について本論文が与える解の確証性を高めること、これが今後の研究の課題である。

中でも、まず注目すべきは浪花公会設立と澤山按手礼式の1877年から、澤山と共に自給論を主張したレビットが米国に帰任する1881年の間の出来事と、この間の澤山、新島の接点であると思われる。これはまさに「梅花」の、またその自給の精神の開花の時から始まり、これが挫折したかに見えるまでの時期である。先にも指摘したが、この間に女学校設立の気運が高まり、同志社女学校の創立、梅花女学校の創立がなされ、これと並行して澤山と新島が共に委員となった日本基督伝道会社が発足した。ここで日本のキリスト教宣教も広がりを見せている。そうした日本全国のキリスト教宣教に関わる出来事としては、1878年に東京築地で第1回基督信徒大親睦会が開催されている(澤山はこれに出席し、祝祷、演説、閉会祈禱を担当している⁴¹⁾。新島が出席したかどうかは不明)。またこの年から、澤山と新島の両者が関わっての岸和田伝道が開始する⁴²⁾。更に、1879年には浪花公会の伝道により、澤山を仮牧師として天満橋公会が発足するが(その設立式には新島も出席している⁴³⁾)、澤山は病状の悪化に伴い、わずか1年で天満橋公会仮牧師を辞任することとなる。「浪華教会」、また「浪華病院」を会場として、澤山が司会を務め、新島が委員として年度報告を行った同年の日本基督伝道会社の第2年次会においては、澤山は病氣療養のため、同志社卒業生の吉田に牧会活動を依頼したことが報告されている⁴⁴⁾。続く1880年5月には、日本基督伝道会社の第3年次会が梅花女学校で開催され、澤山は年報を読み上げるほか、聖餐式を担当している。特に注目すべきは、同志社の最初の卒業生が教会に赴任するこの年、伝道会社の自給体制がほころびを見せつつあったこの席で、澤山はレビットと共に頑強に自給論を展開して、結果、他地区はさておいて大阪地区のみを自給で行うことを決定していることである⁴⁵⁾。この頑強な自給論の展開、その他同志社との軋轢によってであろうか⁴⁶⁾、レビットはアメリカンボード本部からの指令により、米国への帰任を余儀なくされている⁴⁷⁾。

なお、この年には梅花女学校を会場に、第2回全国基督信徒大親睦会が開かれ、澤山も新島も共にそこで役割を担っているから⁴⁸⁾、いかに密接に両者が日本宣教という同じ舞台上で学校運営とキリスト教宣教の働きに携わり、相互を意識していたかは明白であろう。加えて、先に描出したような経緯からは、アメリカンボードの日本における宣教が一筋縄のものではなくて、そこには宣教師それぞれの思惑の相異があり、また宣教地それぞれの個性があり、その舞台が、アメリカンボードにとっても複雑で緊張に満ちたものであったことが明らかになってくる⁴⁹⁾。

そこで、このような素描を通してだけでもすでに明らかであるのは、明治初期の会衆主義教会の宣教活動とその内部の微妙な差異とを把握するために、これまでは十分に為されることがなかった澤山と新島の個人的な接点についての——とりわけ両者を分かちながら、しかし「観梅の謎」において新島がそれを強く意識しているとも思われる「梅花」の精神、すなわち自給の精神を巡っての両者の関係、また、両者が互いをどう意識していたのかについての——、より詳細な検討が必要だということである。

おわりに

ところで、本井氏の推測するところによれば、新島はその月ヶ瀬観梅の翌年の1888年、同郷の教え子である深井英五に「真理似寒梅、敢風雪侵開」という漢詩を色紙に揮毫して与えている⁵⁰。「月ヶ瀬に行く深井に新島が『寒梅』の漢詩を贈ったのではないかとすれば、この詩が前年に月ヶ瀬で作詩された可能性、でなければ少なくとも翌年に月ヶ瀬の梅を想い浮かべて詠んだ可能性が、ともにある」⁵¹、本井氏はそのように述べている。

いずれにせよ、深井は新島から金をもらって月ヶ瀬に梅を見に行くよう言われ、1888年の4月4日、同じく同志社生徒の鈴木彦馬と共にこれを訪れている⁵²。深井自身も「春休みに、一円だったか、二円だったか下すって、月ヶ瀬の梅を見て来い、といはれた。どう云ふ訳だったのか、場所まで指定してあった。梅の季節は少し過ぎて居たが、私も其の通りにして、勿論徒歩で二泊して、月ヶ瀬の梅を観て帰った」⁵³と述懐している。ここで深井もまた、「梅の季節は少し過ぎて居たが」と記している。

ところで、この深井と鈴木の名は、同志社における「ウィリアム奨学金」の受給者であった。米国の篤志家によるこの奨学金を受給するものは、その篤志家の希望により「ウィリアム」を名乗る、というのが受給の条件であったという⁵⁴。そのように西洋のアルファベットの名を与えられ、その名に自らのあるべき姿を重ねつつこれを我がものとするということは、新島も澤山もが共に経験していたことであった。そうであれば、新島が深井に、あるいは鈴木にも、月ヶ瀬での「季節は少し過ぎ」た観梅を促した動機というものも推測可能になってくる。仮に新島が、漢詩に詠んだような敢えて風雪を侵して開く梅を見せたければ、より早い日程を指定することもできたはずである。そこで新島が、自らが見たような「季節は少し過ぎ」た梅を、西洋の名を名乗るべき自らの生徒に見せたかったのだとしたら、これもまた「観梅の謎」の解が、澤山保羅に関わるものである事を示してはしないだろうか。そしてそのことは、同じく新島の寒梅の詩のモチーフについても、そこに本井氏の指摘する如く月ヶ瀬の梅が思われており、そしてその梅の背後に澤山保羅と梅花女学校があるということについての推測の確度を高めるものではないか。

ここで考察の本筋からは離れるものの、なお加えて記しておきたいのは、そうした推測に確証が得られるとするならば、目下の同志社大学今出川キャンパスにおいて、澤山を米国留学に、またこれを通じてキリストの道へと導いたグリーンが設計をし、澤山が起工式の折に祈祷を捧げた彰栄館と⁵⁵、これに並び立つ同じくグリーン設計の同志社礼拝堂、そしてその前に植えられた4本の梅の木、その傍らに立てられた先の寒梅の詩を刻んだ石碑は、奇しくもそれぞれが美しく響き合って、今も「梅花」の香りを同志社に届けるものとなっているということである。それらの配置構成はまさに、明治初期にキリスト教宣教を舞台に先駆けた二人の日本人と、彼らを導いたアメリカンボードとの美しい関係を、美しくも表すものとなっていないだろうか。もしそのように言うことができるのだとしたら、この二つの会衆主義の学園の関係は、いかに豊かなものとして表象しうるものとなるだろうか。

そうであればこそ、なお更に、本論文の示す「観梅の謎」の解の確証性を高める研究がこれに続かねばならない。

註

- 1 笠井秋生、佐野安仁、茂義樹、『沢山保羅』、日本キリスト教団出版局、1977年、14～15頁、また茂義樹、「明治初期における組合教会の大阪伝道と梅花女学校——明治二年十一月より明治十三年六月まで——」、梅花学園澤山保羅研究会編、『澤山保羅研究』第一巻、梅花学園澤山保羅研究会、1968年、42～62頁に所収、43～44頁参照。
- 2 1883年、大阪で開かれた在日宣教師会議において澤山は英語で自給論を主張した。Cf., Publishing Committee, *Proceedings of the General Conference of the Protestant Missionaries of Japan, Held at Osaka, Japan, April, 1883*, R. Meiklejohn & Co. Yokohama, 1883, pp.291-305. 数少ない澤山の著書である『日本教会費自給論』は、その際の講演を日本語にしたものである。梅花学園沢山保羅研究会、茂義樹編、『澤山保羅全集』、教文館、2001年、58～69頁に所収。
- 3 笠井、佐野、茂、『沢山保羅』、105頁、また武本喜代藏、古木虎三郎、『澤山保羅伝』、警醒社書店、1910年、91頁以下参照。
- 4 和田洋一、『新島襄』、岩波書店、2015年、194～195頁、231頁参照。
- 5 同書、194～195頁。
- 6 同書、231頁。
- 7 同書、288頁参照。
- 8 笠井、佐野、茂、『沢山保羅』。
- 9 平和生、『郷土の偉人・愛と祈りの人——澤山保羅』、平和生、2006年。
- 10 Vgl., Jürgen Habermas, *Zwischen Naturalismus und Religion*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 2005, S.218. なおハーバーマスは、2004年の「京都賞」受賞に際して京都を訪れている。
- 11 野田宇太郎、「大和月ヶ瀬の新島襄」、『明治村通信』第36号、明治村東京事務所、1973年、8～9頁に所収、8頁以下参照。
- 12 本井康博、「観梅の謎」、『敢えて風雪を侵して——新島襄を語る（四）』、思文閣出版、2007年、54～74頁に所収。
- 13 新島襄全集編集委員会編、『新島襄全集』第8巻、同朋舎出版、1992年、402頁。また、新島襄全集編集委員会編、『新島襄全集』第3巻、同朋舎出版、1987年、457頁。
- 14 この点、「本当に名張川溪谷の絶景に接し、梅林をさまよふためには月ヶ瀬から月ヶ瀬橋を対岸に渡り、桃香野とは反対の名張川上流右岸の高地にある尾山、長引などの部落をさまよはねばならない」という野田氏の指摘には疑問符がつく。なんとなれば、月ヶ瀬橋は1893年になって始めて架橋されている。月ヶ瀬村史編集室編、『月ヶ瀬村史』、月ヶ瀬村（奈良県）、1990年、446頁以下参照。
- 15 野田、前掲書、9頁、また、本井康博、「新作能『庭上梅』東京公演」、『元祖リベラリスト——新島襄を語る（五）——』、思文閣出版、2008年、1～23頁に所収、23頁参照。
- 16 『新島襄全集』第8巻、402頁、また『新島襄全集』第3巻、457頁参照。
- 17 本井、「観梅の謎」、67頁参照。
- 18 本井、「新作能『庭上梅』東京公演」、19頁、また多田直彦、「新島襄と『梅』」、同志社社史資料センター、『新島研究』第104号、2013年、174～194頁に所収、194頁参照。
- 19 同書、181頁。
- 20 野田、「大和月ヶ瀬の新島襄」、9頁。
- 21 月ヶ瀬村史編集室編、『月ヶ瀬村史』、430頁参照。
- 22 同書、978頁参照。
- 23 更に、1969年には高山ダムが造られてかつての梅林の中心部は水没している。気候の違いもあるだろうが、現在でも4月1日であれば、花はほとんど散っており、月ヶ瀬に梅花を観ることはできない。「月ヶ瀬梅溪梅まつり」も、2018年であれば2月18日から3月31日に設定されている。
- 24 名勝月ヶ瀬学術調査準備委員会、『名勝月ヶ瀬学術調査報告』、名勝月ヶ瀬編纂委員会・奈良県月ヶ瀬村、1957年、133頁参照。
- 25 『澤山保羅全集』、934頁以下参照。
- 26 同書、931頁以下参照。
- 27 新島襄全集編集委員会編、『新島襄全集』第2巻、同朋舎出版、1983年、653頁、また本井康博、『新島襄の師友たち』、思文閣出版、2016年、175頁参照。なおその際の説教は『新島襄全集』第2巻、243～251頁に所収。
- 28 『澤山保羅全集』、936頁参照。

- 29 『新島襄全集』第8巻、401頁参照。
- 30 同書、401頁、また『新島襄全集』第3巻、456頁、また『澤山保羅全集』、937頁参照。なおその際の説教は『新島襄全集』第2巻、261～263頁に所収。
- 31 新島は告別説教において、澤山は「死シタルニアラス永眠アラス、命ヨリ命ニ移リ榮ヨリ榮ニ移ル、今ハキリストノ榮ヲミテ其ノ榮ヲ受ケ喜ナルヘシ、嗚呼地上ニ此ノ良友ヲ失ヒタレトモ天上ニ一ノ友ヲ加ヘタリ」（同書、263頁）と語っている。
- 32 パウロもまた自給での伝道を行っていた。コリントの信徒への手紙一、9章13～18節参照。
- 33 『澤山保羅全集』、886頁参照。
- 34 『新島襄全集』第8巻、170頁参照。
- 35 同書、203頁、また『澤山保羅全集』、898頁参照。なおこの伝道会社の二次回は、浪花教会と浪花病院で行われた。『新島襄全集』第8巻、193頁、また『澤山保羅全集』、895頁参照。
- 36 本井康博、『新島襄の師友たち——キリスト教界における交流——』、171頁参照。
- 37 これについては野田氏が指摘しており、本井氏も自らの足でこれを確かめている。野田、「大和月ヶ瀬の新島襄」、8頁、また本井、「新才能『庭上梅』東京公演」、16～18頁参照。
- 38 同書、22頁、25頁参照。
- 39 『新島襄全集』第8巻、134頁、137頁、また新島襄全集編集委員会編、『新島襄全集』第6巻、同朋舎出版、1992年、1985年、160頁、更に本井康博、「宣教師・新島襄の誕生」、『アメリカン・ボード200年』、思文閣出版、2010年、87～117頁に所収、103頁参照。
- 40 梅花学園九十年小史編集委員会編、『梅花学園九十年小史』、梅花学園、1968年、51頁、またその際の勧告の原稿と思われるものは、新島襄全集編集委員会編、『新島襄全集』第1巻、同朋舎出版、1983年、419～422頁に所収。
- 41 『澤山保羅全集』、889頁以下、また『新島襄全集』第8巻、178頁、更に『七一雑報』明治11年30号、7頁（『復刻版七一雑報』第3巻、不二出版、1988年、238頁）参照。
- 42 『澤山保羅全集』、891頁、また『新島襄全集』、第8巻、396頁参照。
- 43 『新島襄全集』第8巻、184頁、また『澤山保羅全集』、892頁参照。なお両史料で、設立の日付が異なっている。『新島襄全集』第8巻には12日、『澤山保羅全集』には20日とある。ただ、この年の1月12日は日曜日であり、また『天満教会百年史』にも1月12日とあるから、1月12日が正しい日程であると思われる。天満教会百年史刊行委員会編、『天満教会百年史』、日本基督教団天満教会百年史刊行委員会、1979年、5頁参照。
- 44 『新島襄全集』第8巻、193頁、また『澤山保羅全集』、895頁参照。
- 45 『澤山保羅全集』、899頁、また『新島襄全集』、第8巻、203頁、更に日本基督伝道会社、『日本基督伝道会社略史』、京都印刷株式会社、1898年、6頁、『七一雑報』明治13年23号、3頁（『復刻版七一雑報』第5巻、不二出版、1988年、179頁）参照。
- 46 『澤山保羅全集』、896頁、また同志社社史々料編集所編、『資料彙報』一集、同志社社史資料編集所、1968年、3頁。
- 47 『澤山保羅全集』、902頁以下参照。
- 48 同書、900頁、また『新島襄全集』、第8巻、205頁、更に『七一雑報』、明治13年29号、7頁（『復刻版七一雑報』第5巻、不二出版、1988年、231頁）参照。
- 49 これについては本井氏が以下の論考において指摘するところである。本井康博、『『京都ステーション』の特異性』、『アメリカン・ボード200年』、思文閣出版、2010年、38～62頁に所収。
- 50 本井、「観梅の謎」、71頁、また本井、「新才能『庭上梅』東京公演」、21頁参照。その揮毫については大越氏が以下の論文で問題提起を行っている。大越哲仁、「襄の寒梅と八重の寒梅——2編の寒梅の詩に関する疑問を解く——」、同志社社史資料センター、『新島研究』第108号、同志社社史資料センター、2017年、61～88頁に所収。
- 51 本井、「新才能『庭上梅』東京公演」、21頁。
- 52 同所参照。
- 53 深井英五、「新島先生の思ひ出」、同志社社史資料室編、『追悼集』六、同志社社史資料室、1993年、326～329頁に所収、329頁。
- 54 同書、328頁参照。
- 55 『澤山保羅全集』、918頁参照。